

詩時評

第32回

ポツンと 方丈の小部屋で

松本衆司

トレンディードラマという言葉が昭和に流行った。パブル景気の頃の都市に住む男女の恋愛やトレンドを描いたファッショナブルなものだった。時代は昭和から平成へ、IT革命の号令の中、令和へと進み、非接触のコロナが拍車をかけ、あらゆるものがオンラインとなった。しかも、生成AIなるものが今までの日常を加速度的に一新しようとしている。今では、ハイテクなトレンドの先端に触れていなければ、終わった存在であるかのような空気が漂っている。これはファッショイダ。心ある人は人里離れた一軒家に隠遁し……とここまで書いて、オンラインでは世捨て人になれない、と庵ならぬマンションの方丈の小部屋でポツンと詩と向きあっている。

『富士秀詩集』『スベリヒユの冷たい夏』(詩

遊社)を読む。「流刑生活」を引く。

闇の中に白い太陽が鈍く輝いている町で私は生活していた／私は何かの刑罰を受けて／その町に追放されていたのである／そんな生活がいつまで続くのか／私には見当もつかなかったが／ただ文学を研究することだけが／私の生きる慰めであった／古今東西の文学作品を紐解くうちに／私は様々な人物と出合い／彼らからたくさんことを学んだ／その中で、最も私が親しんだのは／透きとおった白い肌を持つ美しい女であった／冷たい悲しい真実だけを静かに語る伶俐な女は／いつも私を熱く抱きしめて／深い眠りの世界に引きずり込んだ／その女が「死」であることは／私にはわかっていたが／私は、女を「詩」と呼ぶことで／死に対する自分の恐怖を／わずかに回避することができた／私は、夜ごと女と激しくセックスすることで／「詩」を書くことができた

衰えを知らない旺盛な筆力である。収められた幻想性豊かな作品群はいずれも楽しい。右の「流刑生活」を引いたのは大いに共感したからだ。「後記」の「意味のない世界をも包含するさらに大きな意味の世界に今、私は大きく一歩踏み出したところである」は、富

上氏の新しいステージを予感させる。

『天飛』が三上真知の個人誌となつての三号。A4紙二折、六面使つた詩誌だが、彼女の難民支援活動の記録でもある。

今年四月十八日、国連人権理事会の特別報告書が、入管法改正案は国際法違反だとし、日本政府に見直しを求めました。指摘された問題点の一つは、「司法の承認なく、行政機関の判断のみで収容が行われる」ことです。A氏の事例は、それを端的に示しています。A氏は入管の仮放免中のアフリカ出身者です。仮放免中は、労働が禁止されているので、家賃や光熱費も払えず、極度の生活難に陥りました。生活に困窮したA氏は、今年三月十一日に入管に再収容を希望し、自ら申し出ました。しかし入管はそれには応じませんでした。しかたなくA氏は、支援者の経済的援助にすがり、どうにか日々を送っていました。三月二十八日、入管職員数人が突然アパートに乗り込んできて、A氏に手錠をかけ、連行し、収容しました。／自ら望んだ収容とはいへ、犯罪者扱い同然の暴力的な拘束手段や、理不尽な対応に関して、A氏は入管側に何度も説明を求めました。しかし入管は、一切応えようとしません。A氏は抗議の意味で、そ

の日以来断食を執行し、働くことができる
在留特別許可を求め続けています。薬を服
用する時すら水を飲まないため、かなり危
険な容態に陥り、現在は二十四時間医療的
な経過観察が必要になり、入院を余儀なく
されています。／国際的人権基準を全く考
慮しない入管の処遇に対し、A氏は、今な
お、正に、命を懸けて抗議を続けています。

激しい混乱の中、入管法改正案が六月八日
に一方的に可決されたことは誰もがニュース
で知っている。れいわ新選組の山本太郎代表
の必死の形相が忘れられない。その向こうに
三上さんによって知らされたこの現実がある。
すべての理不尽な出来事は閉鎖性によって生
じる。旧統一教会のような宗教法人、滝山病
院の実態が暴露されたが、病院や老人介護施
設もそうだ。民主国家日本社会の出来事だ。

神尾和寿詩集『巨人の星たち』（思潮社）
を読む。題詩の1と最後の9を引く。

1 チュータがダマテンで役満を上げる／
イッテツが雀卓をひっくり返す／ミツルが
ヘアーをリキッドする／イッテツが雀卓を
ひっくり返す／ヒューマはアスファルトの
道の上を走っている／アキコがとても熱い
お茶をお盆にのせて運んでくる／イッテツ

が雀卓をひっくり返す／ホーサクが故郷で
暮らす兄弟姉妹のことを自慢する／イッテ
ツが雀卓をひっくり返す／ヒューマは鉄の
下駄を脱ぎ捨てて裸足で走っている／シン
ゾーが寝言を並べる／イッテツが国会議事
堂をひっくり返す／シエークスピアがたつ
たの十秒で起承を転結させる／イッテツが
日生劇場をひっくり返す／ヒューマは都会
の夜明けを走っている／オンナは男になる
／イッテツがひっくり返そうかどうか思案
しはじめる／盗んだ手紙を返そうかどうか
／ヒューマは足を止めた／星の命は一億年
／長い寿命だが 限りはある

9 むすんでひらいて／辞書を引いて悩ん
で／問題を起こして／自分で罰してみても
友だちのひとりひとりに電話をかけて汗を
かいてみて

風刺と真実を、或いは意識と無意識を織り
交ぜながら、詩人の半生の夢と記憶の時間を
振り返る軽妙洒落なライト・バースだ。言葉
の手捌きが実に巧みで、そうだった、こんな
ふう生きてきたとか、時代が変わった、と
か、そんな感懐を続けたくなる詩篇群だ。

岩佐なお詩集『たんぼ』（思潮社）を読む。
「責任」を引く。

いとをかしの／暮れ方だった／かれこれ照
和も枯れて／外では行く手の景色もすけす
けの頃／黒電話が／どすをきかせて鳴った
／重いジュワツキをとると／耳を当てると
／ここから声がした／あなたのお骨がしまし
たから責任もって／引き取りに来てくださ
い。という／やるせない気分さ。／昔そこ
は一軒家の喫茶店だった、という／とり壊
されて掘りおこされて／私が出た／部分的
であったから極端に／責任を感じることも
なかった／いい加減なサテンのあるじは自
称詩人で／店自慢のブレンドコーヒーはイ
ンスタントだった、という／少しは責任感
じろよ。／と読者諸氏は思われるかもしれ
ない／ほら／また秋の暮だ／言葉はなにを
肴に付け合わせて／雰囲気やここちもちを
供するべきか／ここから先は長い夜／思い
出にふけるにはもってこいだ／つらかった
なあ。／あの頃の心の日照り／骨の出たあ
たりは駐車場になるそうで／ほら／あなた
の青山もゆるりと隠れた／夜の帳が下りて
きたなら／利き手でひよいとかるく持ち上
げて／くぐれば／甲い酒にちがいない

昭和も随分遠くなった。その青春の時を懐
かしむ——この詩のように。当時の若者は、
生きることに彷徨した。あらゆる欺瞞と闘い、
アナーキーな実存として真実を求め、自らの

生を生かそうとした。そして、知らず知らず他者を傷つけ、自らも傷ついていった。そこに自分を落として行きながら。

大土由美詩集『悲しみも逆さか』（梓書院）、
「チエルノブイリのひよこ」を引く。

チエルノブイリの怪物の話を開いたかい？
／それは、牛ほどもあるひよこだ／放射能の霧がただよ／チエルノブイリの森の入り口で／コリヤじいさんが見たそうなの／そいつは／風の音にまぎれて／ピュールルツ、ピュールルピユーツと／高く低く遠く鳴く／季節は何十何百も巡り／ひよこの身体はしだいに透けていくというのに／痛みはいっこうに治まらない／月の無い夜には／パンパンに腫れた半透明の丸い腹の中／放射能がチカチカチカチカ不気味に光る／あの日からずっと忘れられた今も／独りぼっちのひよこは／荒れて汚れた果てない森を／彷徨い続けているらしい

生きるとは記憶の堆積と忘却であり、思い出は心の壁に染みている。それがある詩人は哲学者のように、また、ある詩人は音楽家のように、詩の言葉で世界化する。大土由美は寓話のように書き留める。見事な手法だ。

塚本敏雄詩集『さみしいファントム』（思潮社）を読む。「行雲流水カフエ」を引く。

始めました／畑のなかの小さなカフエ／取り立ててコンセプトありませんが／窓だけは大きくとりました／辺りの風景がよく見えるように／夜になると内部の灯りが洩れて／田畑を暗々と照らします／春には揚げひばり 夏には夕立ちの撥ね／秋の平野の向こうに落ちていく夕陽／冬にはお山から吹き下ろす風の切れ／そんなものでよろしければ／供することができます／何かお召し上がりになりますか／鰯の南蛮漬け 鯛の丸干し／どちらも小ぶりに限りません／今日はたまたま／蓮根の治部煮を作りました／抜かりなく銀杏も入っています／野良仕事を終えた近所のおじさんが／かずえさん 夜に寄らせてもらうよ／と声をかけてくださいます／今夜は珍しく／結果を超えて／足の見えないお客様もたくさん見えられて／千年の昔話が賑やかに／野山のものたちも皆楽しげに／聞き耳をたてています／命を喰らうことでしか生きられない私たち／そんな私たちの咎多い営みが／繁ったり陰ったり／少しく身を傾げながら／今日も静かに野山に溶けていきます

まるで、吟遊詩人が過去からの時間を往還

しながら紡いだ詩を、ギターか何かを爪弾きながらしみじみと語り聞かせる……そして、聴衆のように読者はその言葉の声に心寄せせる。そんな風情を感じさせる詩集であった。

近藤摩耶詩集『水晶空間』（思潮社）を読む。
「鳥のモビール 百合の木から」を引く。

上空に気圧の谷がきて／百合の木の下の小さなバス停にかすかな風が起る／時が経ち／西に山がある街では／山の向こうにいち早く日が隠れようとし／旗のぼりがひるがえり／書かれた広告にしが寄り／白い鳥が飛んでいく／体に継ぎはぎがあり羽を開いたまま／今しがたまで／中ホールのロビーの上で／天井扇風にくるりとふわりと回るだけだった／鳥のモビールが／ひいらぎの葉枝をくわえ／洩れてくる円舞曲に押され／赤や青の電飾がひかり／人が熱いチョコレートを飲み／紙芝居や朗読劇を鑑賞する／にぎやかな生誕祭の集い／を過ぎ／それは遙か先から振り返る／ずっとむかしの油彩のなかの／鮮やかな色調のころのこと

詩集の白い表紙には「ヒマラヤから来た青いケシの写真」が大きく写し出され、題名にある水晶の柔らかな光に包まれるかのような

時空を超えた不思議な場所に、読者は誘われる。いずれの詩もその書き出しと終わり方が実に上手く、魅かれる。

風森さわ詩集『明けぐれの人』（土曜美術社）を読む。「明け方も会えない」を引く。

明け方に会う人には／目覚めては決して会えない／おぼろげにそれかと思える間／寄る辺なき道に漂うままに／とけ入るように消えてしまう／生まれ急いだ初めての子は／一昼夜もなく息絶えて／一目も会えないままだったから／明け方にさえ現れない／聞けばその刻／迷い抜いていた夫が／死んだ赤子は見せてはいけない／母親は気が触れてしまうと／身近な例を聞かされての／苦渋の選択だったという／新生児室のケースの中で／名付けられる間もないままに／互いに一度も顔を見ず／いまだ明け方にも／幻にさえ会えないままで／それは名もない者のせいではない／むしろ親を恨むほどにも／生きられなかった／おまえのその薄幸を／黙ってそっと／抱きしめていよう／朝もやの儂い時の間にも

生老病死や愛別離苦は人の世の定めである
とはいえ、耐え難い現実の中で歯をくいしばり生き抜いていくことはあまりに苦しい……。

そうなのだ。生きるとは哀れなのだ。故人は人間は尊い。風森さわの思いに共感する。

大工美与詩集『これからは』（詩遊社）を読む。「十二歳の時の詩」を引く。

中学一年の国語の時間／次週迄に詩を一篇提出せよとの宿題が出た／どうすれば書けるのか／不安げなクラス五十人、百個の目玉が／先生を見つめる／先生は「あっ」、「おう」と思ったり／「あああ」と思ったことなどを書き出し／心がどう動いたかを書くようにと指導した／大阪で積雪を見るのは珍しい／私は数日前に見た雪景色を書こうと決めた／雪／朝、起きたら外は真っ白な雪景色だった／道路も校庭も真っ白だ／下校の時にはぬかるんでちょっと残念だった／でも、体育館の裏の雪は靴跡ひとつなく／朝の雪と同じだった／いい匂いがした／先生は褒めてくれたが学級委員の沢くんが雪／匂いはない、いい匂いがしたように感じた／と書くべきだとケチをつけた／あの日から七十年近く経つ／嗅覚も衰え、今や雪の匂いをキャッチ出来ない／もう、あの日の詩は書けないのだ

過去を振り返ることも、今を語ることも、無理のない言葉と文体でさらりと描かれてい

て、読み手を詩の世界に導いてくれる。それぞれの詩篇に人肌の暖かさが通う。きつと上質な人生を紡がれた素敵な書き手なのだろう、とそんな感想を抱いてしまった。

北條裕子詩集『半世界の』（思潮社）を読む。「相聞」を引く。

西の空にある大きな眼が 赤く爛れて／震えながら抱きあうきみとぼくとを／みつめ／そびえ立つ 光に濡れた鉄塔は／町の隅々までをも 支配する／かつて 桜満開の夜が終わるころ／きみはたつたひとり／熱と汗にまみれて 目覚めた／そして家族はいつかなくなることを／骨の髄液まで 思い知らされた／知ってる？／桜のはなびらが／風のかたちにつらなってるって／いつかぼくを置き去りにしてしまふから／わざと何も教えてやらない／桜が経帷子の色をしていることや／きみが泣きながら ぼくをもとめた夜／ぼくがひどくきみを憎んでいたこととかを

あとがきに「今、いる場所が、自分が本来在るところとは思えない」とある。その精神の瀬戸際に詩人は立つ。こちらとあちら、それは生と死、愛と憎しみ、光と影……。この詩は夕焼けに仮託して、幻想が鮮やかだ。